

## キリスト教と武道 - 参考文献一覧

神谷 昌宏

入手できると思われるものを一覧表にし、絶版などで入手困難なものはその後に資料として提示する。

番号	書名	著者/特集記事	出版社	略号
1	武士道	新渡戸 稲造	講談社	武士道
2	一刀流極意	笹森 順造	体育とスポーツ出版社	一刀極
3	武道、いわゆる武士道とキリスト教	笹森 建美	個人所有	武キリ
4	柳生新陰流道眼	柳生 延春	島津書房	柳新道
5	剣道八講	柳生 巖長	島津書房	剣八講
6	正伝新陰流	柳生 巖長	島津書房	正新陰
7	剣道講話	小川 忠太郎	体育とスポーツ出版社	剣講話
8	剣道いろは論語	井上 正孝	体育とスポーツ出版社	剣い論
9	生命知としての場の理論	清水 博	中公新書	生命知
10	剣道の手順	佐久間 三郎	体育とスポーツ出版社	剣手順
11	続 剣道の手順	佐久間 三郎	体育とスポーツ出版社	続剣手
12	剣道	三橋 秀三	大修館書店	剣道
13	百回稽古	小川 忠太郎	体育とスポーツ出版社	百回稽
14	剣と禅	大森 曹玄	春秋社	剣と禅
15	剣道時代 1997 1月号	<b>真人の呼吸</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
16	剣道時代 1998 4月号	<b>剣道は礼に始まり考</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
17	剣道時代 1999 1月号	<b>月の抄の剣理を探る</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
18	剣道時代 1999 4月号	<b>五格一貫</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
19	剣道時代 1999 11月号	<b>宮本武蔵現代への伝言</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
20	剣道時代 1999 12月号	<b>愛の剣道再考</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
21	剣道時代 2000 2月号	<b>もののふの心日本の心</b>	体育とスポーツ出版社	剣時代
22	剣道日本 2000 8月号	<b>宮本武蔵と現代剣道</b>	スキージャーナル株式会社	剣日本
23	月間 武道 2000 4月号	<b>知不有知慮不有慮</b>	日本武道館	月武道
24	剣道独白	神谷 昌宏	個人所有	剣独白
25	剣道独白 II	神谷 昌宏	個人所有	剣独II
26	聖書の達人2 (CD-ROM)	コンピューター聖書研究同好会	いのちのことば社	聖書達

27	Jバイブル (CD-ROM)	コンピューター聖書研究同好会	いのちのことば社	Jバイ
28	剣道時代 2000 9月号	笹森順造自叙伝	体育とスポーツ出版社	剣時代
29	剣道時代 2000 10月号	笹森順造自叙伝	体育とスポーツ出版社	剣時代
30	内村鑑三全集(全40巻)		岩波新書	内村全
31	神への道、神からの道	笹森 建美	キリスト教新聞社	神への

資料 1 剣道時代 特集 「愛の剣道」(発行号未詳)

### 愛の剣道によせて

北海道教育大学名誉教授 廣川 正治

まず本項では、佐藤卯吉範士が主唱された「愛の剣道」に触れるとともに、教育者である廣川正治氏に「活人剣」とは何かについて<sup>そしゃく</sup>咀嚼していただいた。

### 「愛の剣道」は活人剣

本誌の編集部より、佐藤卯吉先生の「愛の剣道」について書いてはしいとのことであったが、私が先生に直接御指導を受けたのは、昭和五年四月から、昭和十八年五月出征するまでである。その間、直接そのことについてお聞きする機会はなかった。その頃は、軍国主義の時代であり、特に十七・八年には軍部の要請で、道場でなく屋外の運動場で、編上靴でゲートルまき、三尺六寸、約六〇〇グラムの竹刀を持って稽古したものである。いうまでもなく実戦に役立つためであった。言いかえれば「殺人刀」を修練したのである。従って、キリスト教的「愛」の剣道について、時たま先生の口からコトバとしてきくことはあったけれども、特に考えてみるということもなかった。先生はキリスト教信者であったから、そのような表現をされたのであろうという程度にしか理解していなかった。

戦前の「殺人刀」的剣道に対する強い反省から、戦後は竹刀を手にしないでいたが、北海道教育大学函館分校の剣道部学生からの強い懇請にほだされて、剣道部の師範をひきうけることになった。やるからには「活人剣」の稽古でなければならない。平和な民主主義国家にあるにはなお更である。

先生の「愛の剣道」と題した文章は、実戦武術の一種であった技術としての剣道に対して、精神的修養面に重点をおいた剣道の教育について述べたものである。教育は愛でなければならないとの観点からである。その立場から、技術としての剣道修練は「殺人刀」でなく「活人剣」でなければならないとされた。(『永遠なる剣道』 P48、49 参照。以下同書からの引用はページのみ) この場合の「愛」はキリスト教信仰にもとづくものであろう。

バイブルでは「主なる汝の神を愛すべし、おのれの如く、なんじの隣を愛すべし」(マタイ伝 22 の 37・39)といわれる。しかし、私の考えでは、信者としての自覚からすれば、神にたいしてはもちろん、隣人にたいしても、愛することが出来ない私であればこそ、その憐れ

むべき自分を愛して下さる神を信じずにはおられないのではなからうか。私が愛するのでなく、私が神から愛されることなのである。私の理解では、信仰はすべて祈りに始って、祈りに終るものであると思うが、キリスト教では、結局するところ「御心のままになし給え」(マタイ伝 26 の 36) に帰すると思う。「愛の唯一の源泉は神である」(P53) それはまた神への絶対的随順である。その意味では親鸞の「南無阿彌陀仏」に通ずる。即ち「自然法爾」である。「おのずからしからしむる」ことであり、「法爾」(如来の力に従うこと)(未燈鈔・五) である。またそれは道元的には「心身脱落」「ただわが身をも心をもはなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなわれて、これにしたがひもてゆく」(「正法眼蔵」生死章) ことである。

「愛の剣道」に対する私の理解は、結局するところ、それは「活人剣」をめざしたものである、ということである。

宮本武蔵を評して「相対的剣道を脱出して絶対的剣道に到達しえた達人」(P39) という。絶対的とは「自己の欲するままに行動することが、自然の道にかなっている。・・・自然と一つになる。自然に没入した境地」(P39) 「自然と自己とが一体となること」(P41) である。周知の通り、武蔵は三十までに六十余度の真剣勝負を勝ち抜いて来た人である(地)が、さらに鍛錬を続けた結果、晩年においては、相手に勝つ剣でなく、自己自身に勝つ剣、「今日は昨日の我にかつ」(水) 剣に到達しえたのである。これは、若き時の剣が「殺人刀」であったのに対して、まさに「活人剣」であるといえよう。「愛の剣道」のめざすところも、「自己内心との戦いに克つことが必要である」(P13) といひ、「勝ちを知ることよりも、敗れたことを自認すること」を重視し、さらに「活人剣」の意義は、相手に対する敬愛、「愛」をもととしてはじめて納得できる(P36) としているように、武蔵と同様、活人剣をめざしていたと考えてよからう。剣道は徳川時代以後、特に礼儀作法を重んじて来たが、それは「興奮しやすい争闘性本能を人間的に統御して修練する」(P32) ことであり、礼儀作法が必要とされるは、相手に対して「もし侮慢し、或は恐怖するの意あれば、彼れ必ずその情を知り、敵意を発すべし」(P34) といひ、「相手に対する感謝と敬意」こそ自己の剣道を発展進歩されるものである。それ故、礼儀作法は「愛」の立場に立って行われなければならないと教えている(P3334)。

以上不十分ながら、佐藤先生の「愛の剣道」を、その遺稿集『永遠なる剣道』第一部をよりどころとして、その意味するところを推察しながら述べてみた。もし先生の真意をゆがめたり、誤って述べている点があったら、ひとえに私の未熟の致すところ、伏してご寛容願いたい。

「愛の剣道」は思考するところ、塚原卜伝の無手勝流、宮本武蔵の晩年の剣、沢庵禅師が柳生宗矩に与えたといわれる『不動智』、それにもとづくと考えられる「無刀」の剣、浅利又七郎から免許を得た後の山岡鉄舟の無刀流はすべてこれ「活人剣」の伝統といえよう。

## 「活人剣」とは何か

活人剣はわが国においては、主として戦国時代の武士達が戦いに勝つために修練して来た殺人刀を基盤として、その「殺人」に対する反省自覚から、心ある剣士達によって、おのずと形成されて来たのであると考える。活人剣といえども、それが剣であるかぎり、殺人刀としての機能を否定することはできない。刀剣は本来、戦いのための武器として製作されたものであり、ナイフや包丁とはその本質を異にするものであることを考えれば、おのずと明らかであろう。前述の「無手」とか「無刀」というコトバで表現された剣以外にも、活人剣をめざして努力された人々があったと思われるが（たとえば、幕末の剣聖、男谷精一郎の座右銘は「克己」であったという）確たる証明ができないままである。特に無手・無刀をあげたのは、それらが剣の性質に、コトバの上で明らかに矛盾するからである。活人剣は矛盾剣である。

殺人刀でないような活人剣は単なる観念的空想である。活人剣であればこそ、もっとも強く殺人刀でなければならない。何故か。

宗教は一般に我々に死をもって追って来る。「汝死の境に近し」(仏教)といひ、「今宵汝の魂とらるしことあるべし」(キリスト教)という、何故か。人生を無自覚に生きているものをして、真の生に目覚めさせるためであろう。それと同じ意味で、殺人刀に裏づけられてこそ、真に活人剣でありうるのである。昔から、禅家はよく、刀剣をもって弟子に追って来る。「両刃鋒を交えて、避くることを須いず」との公案に対して、山岡鉄舟は「雷光影裏、春風を斬る」と悟ったときく。あるいは又、「一剣天に侍って寒し」ということにもなる。通俗的には「切り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ、踏み込みみれば後は極楽」ということであろうか。戦前、佐藤先生に稽古を願った者なら、誰でも経験していることと思うが、先生の“待ち突き”(相手が正面を打ってくるのを、下から諸手突きをくわせる技)である。これこそまさに、「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」居合道で言う「据え物の心」である。皆これ生と死の矛盾の統一である。

「治にいて乱を忘れず」これが武士たるものの心がけである。それは日常生活のなかにある。「平常心是道」と教えられている。私事になって恐縮であるが、私が昭和十六年一月、東京高師の剣道師範の末席を汚すことになったある日、高野佐三郎先生のお宅に御挨拶にあがった折、先生が「日常呼吸するとともに、剣道のことを考えなさい」と教えて下された。真宗では、寝てもさめても、念佛の申されるように生きよ、と教えている。すべて道というものは、そのようなものであると思う。又、学生時代、高野先生から、先生が子供の時から食事の度毎に、箸を短刀にみたてて、切腹の作法をした後でなければ食事させて貰えなかったものだと話されたことを、今も思い出す。剣道師範の家柄の故ばかりでなく、この心がけが武士たるものの平常心であったのであろう。「愛の剣道」でも強調されている礼儀作法は、まさに「切腹の作法」をこそ、その根底とすべきものであろう。「常の身を兵法の身とし、兵法の身をつねの身とするこ

と肝要なり」(水)。

### 形の稽古の重要性

「剣道の形」についてみよう。かつての大日本帝国剣道の形である。改めていうまでもなく、大正の初め、それまであった剣道流派（二百余派といわれる）を、わずかに十本にまとめたものである。その時の制定委員の主査五人の一人であった高野先生のお話では、つねに懐剣を懐にして会議にのぞまれたという。まさに命がけであったのである。現在どれだけの人がこのことを自覚して「形」を稽古しているであろうか。

剣道の形十本の内、太刀の形の一・二・三本目及び、小太刀の形三本目は、「先々の先」で勝ち、太刀の形四・五・六・七本目、小太刀の形一・二本目は「先後の先」で勝つ技である。すべてこれらの形は、相手が先に打って来たのに対して、後から応じて打つ技である。「先前の先」の技は一本もない。何故か。「先前の先」は「形」以前の、いわば初心者の技だからであろう。然るに、現代の剣道試合をみ、また人にきくところ、審判が勝を宣してくれる技は、ほとんどといってよい程「先前の先」である。とはいえ、私自身最近はほとんど剣道の大会なるものをみていないので、事実と反するものであるかも知れない。そうあってほしいけれども。どうも今はただ、大会で優勝することのみを求めて稽古してはいないであろうか。「愛の剣道」でいう、柏手に感謝し、審判の結果如何にかかわらず、自己の負けをこそ自認するような剣は笑うべきものであろうか。

活人剣の修錬が、殺人刀に裏づけされたものとして生かされるためには、木刀は真剣の隣り、竹刀は木刀の隣り、即ち、竹刀は真剣の隣りの隣りであること。つまり、木刀・竹刀は真剣を代行するものであることを、つねに意識して、刃筋・物打ちを正しく、稽古することが大切になる。その意識なしには、剣道は単なる棒振り競技に墮するであろう。この点からも「形」稽古の重要性がわかるであろう。徳川時代末、防具稽古が盛んであった頃においても、寺田五郎衛門は組太刀（形）のみを稽古したとき。その見識を知るべきである。武蔵もいうが如く、「色をかざり、花をさかせて」「実のすくなき」(地)ものになっていはいはしないか。彼にいわせたら、現代はまさに論外といわれることを私は恐れる。「兵法の道は死する道」(地)である。その上で、すべて道たるものは「人間におめて」(地)（それは「愛」の問題ではなかろうか）よくみがくべきものである。

### 矛盾剣

活人剣は精神において矛盾剣であると同時に、技においても亦矛盾剣でなければならないであろう。身を離れて、心だけを正すことは空想に近い。宗教的天才ならいざ知らず、少なくとも我々凡夫は、身を正すことなしに、心を正すことはできない。

たとえば坐禅という身体的調節・鍛錬を抜きにして、心の悟りは不可能であろう。日常生活

における平常心の重要性がここにある。剣道教育の本質は、精神の身体的（技術的）形成であると私は年来考えている。殺人刀の身体的・技術的鍛錬を抜きにして、活人剣を上達させることは出来ない。

日本刀は実戦の経験をへて、両刃の直刀から発達したものであろう。日本刀はいうまでもなく、片刃であり、反りがある。矛盾剣とは文字通り、攻めながら防ぎ、防ぎながら打つ技である。片刃と切先が矛（攻め打つ）の役割、前側の鑓が盾（防ぎ応ずる）の役割を演ずるのである。幸いにして私は晩年の高野先生の稽古ぶりを拝見することができた。今にして思えば、先生の技はまさに矛盾剣であった。攻めながら防ぎ、防ぎながら打つのである。従って又、決して早い技ではない。まさに武蔵のいわゆる「ゆるゆると見えて、間のぬげざる」（風）剣風であった。

私は戦前、高野佐三郎先生から剣聖とうたわれたあのすぐれた術技を、佐藤卯吉先生からは剣道精神を教えて頂いたと感謝している。しかし、不肖の身として戦後は表面的には学校剣道が禁じられたことと、北支の戦線で共産軍と戦って来た経験にもとづく反省から、専門家としての剣道をやめて来た。今はただ語弊があるが、道楽として剣道の稽古を続けているだけである。七十を過ぎてからは特に社会的に責任あることはすべてやめ、講演も断わり、責任ある文章も書かずに来た自分である。此度は誠にやむをえぬ仕儀であった。知る者は言わず、言う者は知らず、かッ！！

資料 2 剣道時代 特集 「愛の剣道」(1991年5月号)

### 剣の心と愛

小野派一刀流宗家 駒場エデン教会牧師 笹森 建美

愛の宗教といわれるキリスト教に於ては実に豊かに「愛」が説明されている。

本項では、教会牧師であり、また小野派一刀流宗家でもある笹森 建美氏に、聖書の教えと剣の心についてまとめていただいた。

### 対者は師、鏡なり

剣道に限らず、全てのスポーツ、格闘技は自分の程度を知り、技を磨き、進歩成長させるために、誰か相手、対者を必要とするものである。特に剣道ではこの対峙する者を大事にする。

武の根本精神においては、この対峙する者、対者を敵とみなすのではなく、自己の鑑、或は教師とみなす。相対する相手によって、今の自分の技量が知られ、また磨かれていくからである。自分が未熟であったり、不十分であったり、高慢であったりすれば、相手もそのように反応し、懸命であり、ひたすらであり、上達していれば、相手もそのように応ずるものである。その最も象徴的場面が相対する構えなのである。

従って剣の道においては、自分を大事にする以上に相手を大事にする。その相手が自分より

弱い相手であれ、同等であれ、強い者であれ、すべてを自分の師、鏡とみなすのである。

この精神においては、自分がより上達し、より完成に向うことを願うことは、同時に相手、対者の成長、進歩をも願うことになるのである。自分だけ強くなればそれでよしとするのは、高慢不遜であるよりは、不完全でまだまだの状態でしかない心の現れである。未熟な者ほど、自分よりすぐれた者の足を引張り、同等の者をけなし、後進の者をさげすむものである。

昔から真の名人、達人といわれた人物は、己だけが強くなり、第一級の存在になるだけではなく、自分以外の者も大切にした。彼らは、かならずよい師を持ち、よい相手を持ち、よい後継者を産みだしたものである。

対峙者をただ敵とみなしたり、叩きのめすだけの憎しみの対象とみなしたり、自分を強くするための道具とだけみなしては、決してよい相手を得ることはできない。相手に対する深い人格的関心があり、人を敬愛し慈しむ心がないとよい人間関係はもてないものである。

昔の達人たちは、自分の最大の可能性を知ると同時に、自分の限界をも知ってそれを越えることを後継者に託することのできた人間だったといえる。己れの足りなさを知る謙虚さは修行に修行をつんで初めて掴みうる事である。

武の教典である『闘戦経』はこれを「知不有知慮不有慮竊識而化骨。化骨識矣（知って知をもたず、慮って慮をもたず、竊かに識<sup>ひそ</sup>かに識りて骨と化す。骨と化して識る）」と説いているが、このことばのいわんとしているところのものは、知って知をもたず、熟慮して己れの限界を知り、自分の到達し得たところのものを全て捨てきり、その上で神からの教えを受け、更に自分の命をも捨てて他者になりきれというものである（化骨）。そして他者になるとは、化す相手の感化を受けて自分を捨て、他に親しみ従い、それになりきることなのである。或は相手にすべてを委ねることなのである。

剣の道はこの繰り返し、継続であるということが出来る。己の達し得たところのもの、そして達し得なかったものも、即ち自分のすべてを後継者に託することは、勇気と相手に対する信頼とがなければできない。自分よりも後から来る者に対しての、愛情と尊敬とがなければ真の後継者は育たないものなのである。

そして更に大切なことは、その事に一筋になれる剣の道、武道に対する絶対的確信と情熱を持つことであり、武道とは何なのかという真理をしっかりとおさえることである。武の心が目指すところのものは相対的なものではなく、絶対的なものであるが故に、多くの者が命をかけて追求して来たし、これからも追求し続けるのである。

### **愛とは捨てること**

このような真理に対する確信と、絶対者に対する深い関心を一言でいいあらわすと愛とよぶことができる。「愛」という言葉のもつ意味は様々であろうが、愛の宗教といわれるキリスト教

に於ては実に豊かに「愛」が説明されている。

聖書の教えに従えば、愛には四つの種類と段階がある。一は肉的爱で、自己の快樂と欲のみを求める愛(エロースとよぶ)。二は身内や家族に対する愛で、自己に属するものに第一義的に向けられる愛(ストルケとよぶ)。三は友人邦友に向けられる愛で、自己の範囲を超え他者に及ぶ愛、時には友のために自分を犠牲にできる愛(フィリア)。そして第四は神の愛、アガペーとよばれる神聖な愛である。

アガペーとは真理を追求する義と聖を兼ね備えた愛であって、すべてのものを一つの完成救いに導くものであり、すべてのものを受容する愛である。その愛を成就させるためには自分の命をも捨てることのできる愛である。

イエス・キリストは「人、友のために命を捨てる、これより大きな愛はない」といっておられるが、この友とは友人というよりは全ての相対する者、対者、対峙者のことであり、キリスト教では隣人とよんでいる。この隣人のために実際に命を捨てたのが十字架での死であった。キリストは自分の救いや、自分の義をまっとうするために努力したのではなく、人々の救をまっとうし、神の義と愛とを示すために自らを犠牲とされたのである。

それ故にキリスト教では、聖と義をもつアガペーの愛のシンボルとして十字架をあてている。

またある人が、人はどうしたら完成に向って生きていくことができるかと質問した時に、イエスは「心をつくし、精神をつくし、力をつくして主なる神を愛し、又自分自身を愛するように、隣人を愛せよ」と教えておられる。つまり不完全な人間が、一つの完成を目指そうとするならば、唯一の真理である神に従い、そして自分を完成させるために隣人の完成を求めなさいといっているのである。そしてこの完成とは、自分が完全無欠のものや、権力者、英雄におさまることではなく、自分の可能性と限界とを知って、絶対者の前に無になり、隣人とともに神に身を委ねて生きるものになるということ、武道のことはばでいえば、崇神、敬人、愛国、そして円相を求むることになる。

剣の道においても、求めるところの最終の目標は、習い覚えたすべてを捨てることだと教えているのである。これが無想剣、或は一刀流という独妙剣の奥義である。逆説的教えであるが、剣を捨てることのできる修行者が達人なのであり、命を捨てることのできる信仰者が永遠の命を得る救われた者なのである。そして愛する者のために最も大切なもの、命を捨てるのが愛なのである。

アガペーの愛とは死ぬことであり、信仰とは死ぬことなのである。

### 聖書の教えと剣の心

武士道の心はと問われるとすぐ引用されるのが『葉隠』の「武士道とは死ぬことと見つけたり」という言葉である。普通に考えると剣の道を修めるのは、自分が強くなり、相手を倒し、

自分が生き残るためであるかのように思うが、そうではなく死ぬことだという。剣の本分が死ぬことだということは、武士は死ぬことによって本来の武士として生まれるのだという逆説的真理を説いているといえる。これは単なる狂気ではなく、何よりも道を求め、義を愛し、聖を求め、命を愛しているからこそできることなのである。

葉隠を誌した山本常朝は「まことの剛の者というのは何もいわずにそっと抜け出して死におもむく者である。相手をしとめる必要はない。黙って斬り殺される者が豪の者なのだ。このような者は、相手をしとめることができるものである」といっている。

この生き方は、あらわれ方は別としても、この世において宣教を続ける責任のあるはずのクリスチャンや宣教師たちが、すすんで迫害を受け、捕えられ、十字架につけられ、火あぶりにされながらも、相手を許し、神を讃美しながら死んでいった様におそろしく類似している。しかも彼らは迫害者に勝っている。

たとえばキリスト教最初の殉教者ステパノは迫害者の目前で彼らのために祈りながら殺されていくが、その時の責任者の一人であったパウロは後に回心し、キリスト者になったばかりでなく、今度は自分が命をかけて全世界に神の愛を説く者となっているのである。

イエスの代表的弟子であったペテロも殺されることが分かっているがローマの都に入り殉教の死をとげるが、彼の死んだ場所だとわかる地に今はローマ法皇庁が建ち、全世界のカトリック教会の中心地となっている。彼らが死ねたのは、主であるイエスを愛し、人々を愛し、真理を愛することができたからである。イエス・キリスト自身、十字架にかかりながら人々の罪の赦しを祈りながらこの世の命をひきとった。その様子を見ていたローマの軍人は「この人こそ神の子である」と告白しているのである。

こうして観てくると愛を中心とする聖書の教えと、剣の心、武道が求めるところのものとが、深いところでふれあっていることに気づく。それ故に明治のはじめ、キリスト教が日本に宣教された時、先ず多くの武士たちが信仰の道に入ったのはうなずけることである。

たとえば本多庸、内村鑑三などという人物がいたが、本多庸一は津軽藩の藩士であり、小野派一刀流をおさめたが、藩命で横浜留学中にクリスチャンになり、後郷里に教会を建てたり東奥義塾（前身は津軽藩校）塾頭となりアメリカ人宣教師を迎えたりした他、東京の青山学院々長ともなった。彼は国土たることと、クリスチャンであることとを誇りとしていた。

内村鑑三は武士道こそ日本に与えられた神からの最大の賜ものであるとし、自らもクリスチャン武士という自覚を強くもっていた。彼は武の心は詐欺、不誠実、権謀術数、陰険、不正真をきらい、キリスト者もまた然りだといっている。

彼はパウロを真正の武士、武士道の体現者とよんでいるが、そのパウロが記した愛の讃歌といわれる一文がある。その一部を引用するが、内村をはじめ、武士からクリスチャンになった

人々には理屈なしに理解できることであった。

「愛は寛容であり、愛は情深い、またねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そしてすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」といい、またいつまでも存在するものは、信仰と希望と愛であるが、その中でもっとも大いなるものは愛であると説いている。

当時の武士たちは、武の道が求めていたものをキリスト教の中に見出したといえる。

### 活人剣

最後に一言触れておきたいのは、剣には活人剣と殺人剣があるということである。先きに引用した『開戦経』は「我が武は天地の初めにあり、一気に天地を<sup>わか</sup>分つ」という書き出しではじまっている。つまり武とは、生成発展、創造の業で、天地をはじめすべてのものはじまりであるという。「分つ」とは「両断」することで、これが生太刀であり生々剣であり、活人剣なのである。

聖書によると天地創造において神は光りを造り、天と地を分ち、すべてのものに存在を与え一つ一つを良しとされた。「良し」ということは原語のヘブル語では、すべてのものが、自己を自己として最善をつくしながら、相対して存在する相手に対して、相ふさわしくあれということ、創造者なる神にすべての目的と根源をおくということなのである。

対峙者に対してふさわしくあるということは、お互いに相手を成長させ、相手を愛することにほかならない。『開戦経』もまた、「我が道は万物の根源、百家の権輿なり」と語をついでいる。故に剣が破壊の道ではなく、悪を断ち、正義を産み、人を活かす創造の道になるためには、義であり、聖であるアガペーの愛を求めることが肝要なのである。相対する対峙者、即ちすべての人々に敬意と慈しみ、即ち愛をもつことによって剣の道は成就すると観ることができるのである。